

小學讀本

T1A1

10

Mo24

文部省編纂

凡條縣
文華堂及刻

小學讀本卷一

明治七年十月 師範學校彫刻

小學讀本卷一

第四回

凡世界に住居する
人以五種あり○亞
細亞人種○歐羅巴
人種○×××人種
○南米利加人種○
亞非利加人種なり
○日本人は亞細亞
人種の中なり



平生食物

又平生食するもの、名を覚えて、これを指へ食物とふは仕方を知らべし。○食物とふべきものに、種々あり、

種穀物、米、粟、稷、黍、稷、粟、黍、稷

第一穀物、ふり。○穀物、米、粟、稷、黍、稷の類、ふり。○此品、

皆田、又、畑に作りて、其實を取り、炊きて、食物とふし、或は

焼きて食物とふれあり、

燂肉、獸肉、鳥肉、魚肉

第二肉類、ふり。○肉類、獸肉、鳥肉、魚肉の類、ふり。○此品、焼きて、食物とふし、又、煮て、食物とふ



菓物、葡萄、梅、柿、蜜柑、鹽漬

第三菓物、ふり。○菓物、葡萄、梅、柿、蜜柑の類、ふり。この品、多く生じて、食物とふ。○柿、又、鹽漬とふして、食物とふむもあり、

野菜

第四野菜の類、ふり。○此品、畑に作るものと、野に生むるものあり。○多く、煮て、食物

とふし、又、鹽漬とふむものあり。○總て、野菜、葉と根を、食物とふす、又、實を食物とふ

實、葉、根

物とふす、又、實を食物とふ



七、士、農、工、商、
別々、幼學、
一、般、文、年、々、

小學校

世間
賢恩

人の務めを種々以て、士、農、工、商とも、皆別々の學
文あり、されども、幼年のとき、習ふべき學文を、み
ふ同トことなり、これを、一般の學文といふ。○こ
の學文を、習えざれば、何れの業をも、學ぶこと、能
えむ。

故に、人と六七歳に至れば、皆小學校に入りて、一
般の學文を、習ふべし。○小學校も、士、農、工、商とも、
皆習ふべき學文を、教ふる所なり。
凡世間の、人々に、賢きものと、愚るるものあり、
ども、皆幼稚のときより、學校に入りて、能く勉強

讀
已

個
様

遊歩
時間

遊歩場
身動
心感

それ、事を、覺えざるト云ふ。○人一大が讀み
て、事を覺ゆれば、已え、これを百たび、讀むべし。○
人、一たび習ふて、事を知らむに、已え、これを千たび
習ふべし。○個様は、怠りなく、勉強を、これを、必ず、事
を覺ゆるものなり。○思ふるものにて、多く
事を、知りたれば、賢き人と、あるものあり。
學校にありて、誓古まるものよ、必ず、遊歩の時
間あり。○此時間にて、遊歩場に、出で、思ひのま
に、遊歩して、身を動かし、心を慰むべし。○勉強
あることあれば、遊歩をも、樂みあり。

遊歩を樂みと思ふ、誓古の時間、怠らぬ勉強
 べべ、

遊歩場に出て、男兒の遊

び戯る、ことを種々あれ

ども、總て危き遊びをあま

べからむ。○輪を廻らし、又

も、爪を揚げ、又も、球を投ぐ

るふとを宜しとを。○相集

りて、遊ぶときを、自分も樂

み、朋友をも、樂ます、むし、



男兒遊戯輪

風球相集

自分朋友

女子、夕了の遊び、男兒と異りて
 馳走、駆け走り、あとの遊びを、あま

ららぬ。○朋友と、連を合ふ

て遊ぶとき、味しく親みて、

何事も、物和々に、あまべし。



第二回

我等、我等も、河の中に、行くと欲す。○我等の、此河の

中に入るを見よ。○私を、汝と共に、此中へ入らん

と欲す。○汝も、好むことあらむ、此中へ行くべし

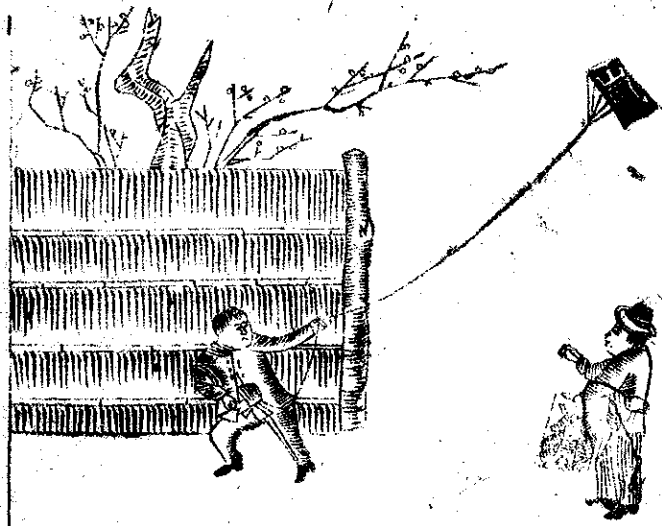
○我等を、皆此中へ、入ることを得るや。○汝も、今

連合、親合、何事

我等、汝

破帽懸木糸登

新彼 空中



彼れを新き帽を帯てり、(彼れ)の古き帽を破れ

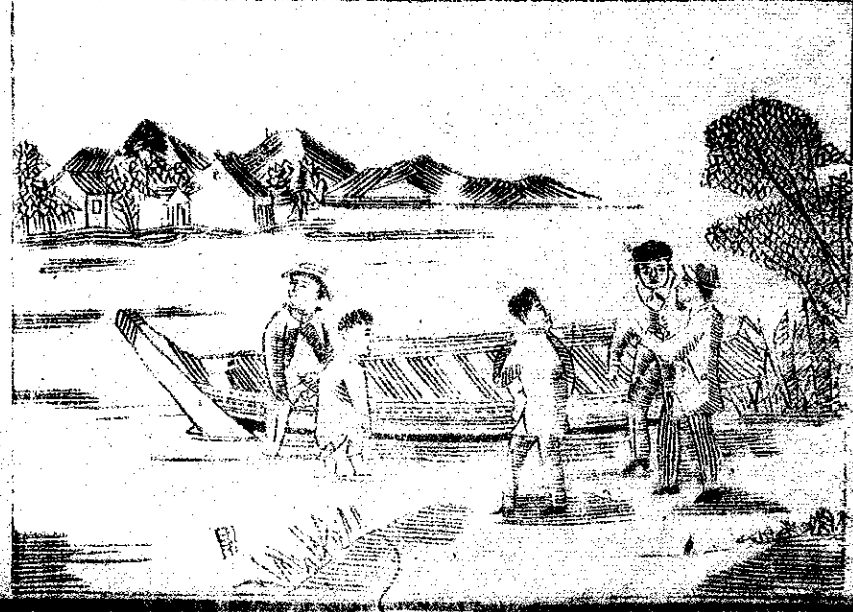
此小兒も新き風を持て
 り、(彼れ)が風を持ちて
 走るを見よ、(彼れ)も風
 を空中に飛をせんと思
 へり、(彼れ)も風の揚るを
 見んと欲するや、(彼れ)も
 空中に登りたるとき、心
 を用ゐるよ、(彼れ)も糸の水
 に懸ることあり、

動

今濕遠陸乾

深水

深水に入らんと欲する
 や、(彼れ)も出づることを
 得べきや、(彼れ)も今彼れも濕ふ
 たり、(彼れ)も遠く、渉るべから
 ず、(彼れ)も陸へ上りて、乾すべ
 し、(彼れ)も今彼れもこの小舟に
 乗らんと欲するや、(彼れ)も
 走、この小舟の、動くを見
 よ、(彼れ)も小舟に乗りて、走る
 べからず

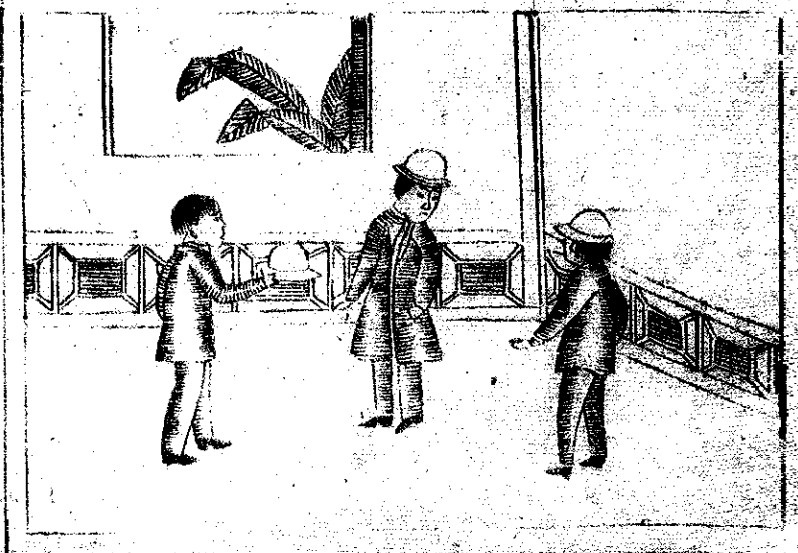


新喜

小瀧頭被私彼

着猫寢床

たりをれゆゑに喜んで新
 喜のを持てり。○新き帽
 能く心を用ゐるべし。
 又をれを濡すべからず。○
 人の小兒を頭に、帽を被
 ぶれぬ。○私の帽を、古きゆ
 ゑに、彼人も、私に新き帽を
 持てと云ふ。○此小兒も、長
 きマントを、着たり。

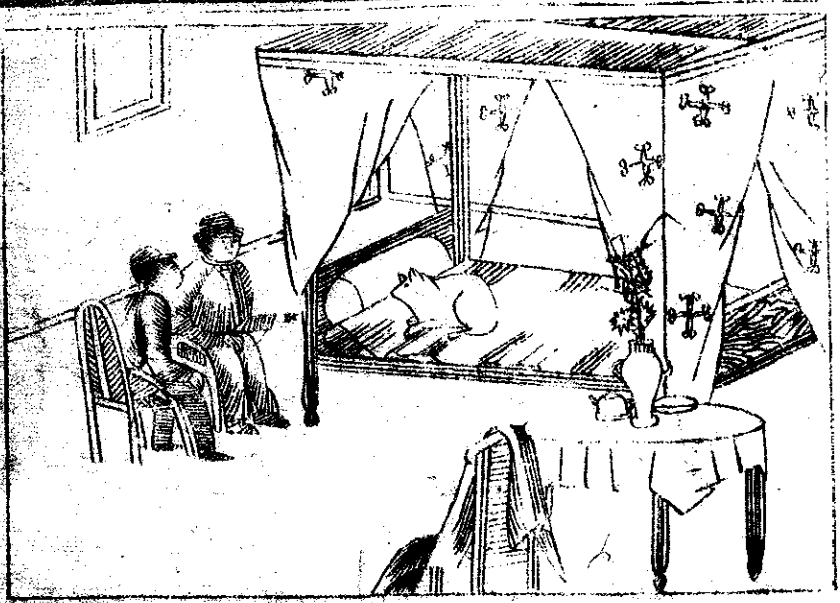


此猫を見し。○寢床の上、居れり。○これく、よき

追退手載

此餘部留所

許氣



猫にもあらず、寢床の上
 に来れり。○汝も、猫を、追
 ひ退くるや。○私の手を、
 載するときは、猫が、私を、
 噛むべし。○猫を、餘所へ
 行くべきや。又も、此所に
 留るべきや。○猫を、此部
 屋の中に、留るといへど
 も、寢床の上に、来るを許
 さず。○汝も、猫を、鼠を捕

如何
權

湖
水

のを見しや、○それ大なる鼠にあらず
 汝え、小舟に乗りたる人
 を見しや、如何にして、彼
 此え、小舟を動かすや、○
 彼此え、權を以て、小舟を
 漕けり、○小舟は、湖水の
 中にあり、○魚は、湖水の
 中にありといへども、深
 水に、あるゆゑに、見ると
 と能くは、



蹴
球

善
終
熱
日

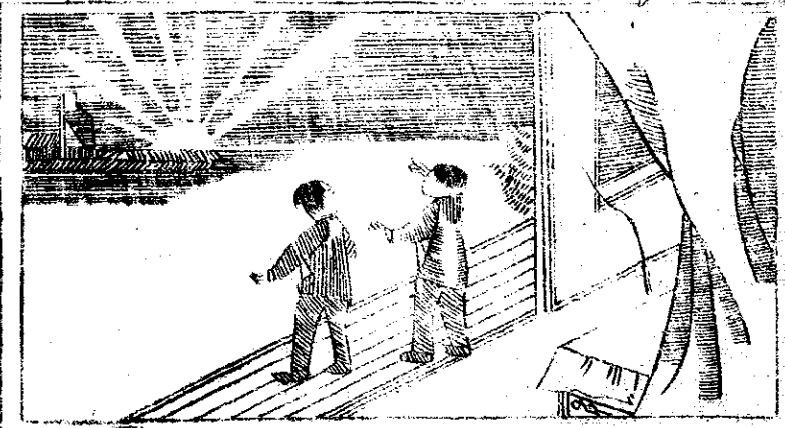


に、長く遊ばへらば、強き熱さに、晒さば、

彼此え、球を蹴て遊べり、汝え、
 それを見しや、○私え、棒を以
 て、球を打つを見たり、其球え、
 堅きものなりや、しこれ、木
 うなる、球なるゆゑ、人に當つ
 とも、傷けり、ことなし、○小兒
 等え、球遊びを好み、○それ
 ち、遊ばへ、善きことなしども、
 終日遊ばへ、からず、又熱き日

身害大登起時
陽出刻

赤色
早



然るときは身を害ふものなり

大陽の登りたるときは我等の
 起き出づべき時刻の来れり
 知るべし。○大陽の登りたるとき
 きに猶寢所に臥すべからず。○
 我等は太陽を見るも、日の出
 を見ることを得ず。○汝は太陽
 の赤きときを見しや、大陽の赤
 色なるときは多く早すること
 あり。

樹
海棠
蕾

花開
奇麗

この山、何れの樹なりや、○
 此海棠の樹なり。○汝は
 海棠の中に、蕾のあるを見
 しや、○此樹を、赤き蕾にて
 満てたり。○私にを蕾を取
 り得べきや、○それを今
 取るべからず。○今暫く過
 ぐると、其蕾は皆花を開き
 奇麗なる、赤き海棠となる、
 其とき汝は、海棠を取るべし。



牝養食汝速食
雞餅老

否

彼鳥
龍女



第三回

彼女も鳥を捕へて、鳥籠に入れたり、汝も彼鳥

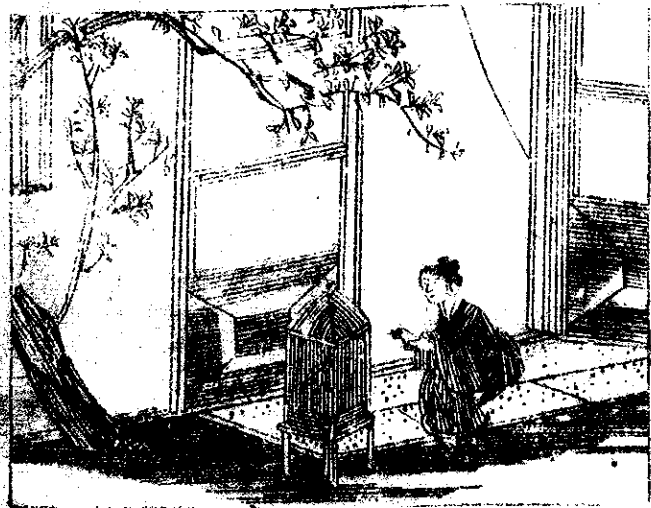
彼人も、牝雞を、養ふ爲に行き
たり、○汝も、牝雞の、食餌を
を見しや、○汝も、若いたる牝
雞の、速うに食するを見しや
○それと、興ふほど、食する
や、○否、それ程多くも、食し得
ず、○牝雞も、何を食するや、○
彼れを、穀物を食せり、

彼飼暴
馴鳥

以前歌
好聞

又跳
飛

又水



を飼ふを見しや、○此鳥も、馴れたりや、又も、暴る
ことありや、○此鳥、今も、馴れたりといへども、

以前も、よく、暴れたり、○汝
も、鳥の歌を、聞くことを、好
むや、又、好まざるや、○私に、
歌を、聞くことを、好まぬ、又、尚
鳥を見ることを、好む、又、尚、
鳥を、跳ぶや、又、水、木の上、
これ、木の上、へ、飛び、上り、
又、水、の、枝、に、憑、へり、○此、鳥

再歸惡小見遠

善兒小

彼小女信切例

籠より出づることを好むや、○昔籠より出づる
とき、再び歸り來るや、又を飛び去るや、

我、惡しき小兒を好まず、

且これを遠ざけんとす、○

惡しき小兒たりとも、好む

ことありや、○善うらざる

小兒にても傷くることな

し然れども、これと共に行くことを好まず

彼れも、彼小女の爲に、信切なりや、○然り、彼れも、

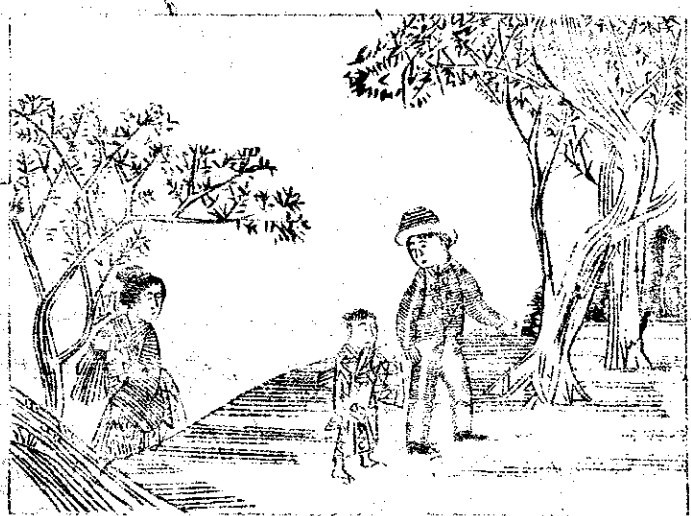
信切にして、彼小女の、倒れざる爲に、手を取て、導



彼路迷

森中

彼任安家



けり、○彼等二人、路に迷

ふべ、まや、○否、彼子、能く

路を知るゆゑに、彼等二人

は、路に迷ふことなり、○彼

等と森の中を通るを志す

とや、○否、恐る、ことなり

○彼れの母は、彼れに任

たるゆゑに、彼れを、小女を

導きて、家に在ると、向しく安んずる、○若家に歸

らんと思ふとき、歸ることを得べし、

杖者人

路傍
息
置

顔
白
年
老
體
屈
歩
行
難
起

汝は老人の杖を獲ふるを
見よやの何に由て彼れを
杖を用ゐるや○彼老人は
路傍の石の上に息ひ其手
を杖の上に置きり○彼れ
の顔と白髪あるに由て彼
れの年老いたるを知り又
老年に由て體の屈みたる
を知れり○老人も杖を倚りて歩
行す杖なきを
何故に歩行し難きや○彼れを起つことを得べ



きや以て歩行することを得べきや○彼れを起
つことを得て又歩行することを得るといへども
速くに走ること能はず

善
顔
人



茲に四人以上の人あり○汝
は此人の年老いたるを知り
や○此人も皆手に杖を持ち
たる老人と同しく年老いた
り○汝は此人を善き人と思
ふや○此人の顔は善人あり
べし○此人は白髪ありや

筒様

笛
喇叭

廣



○我等も筒様ある顔を知り

彼等の持ちたる笛の音は如何なるや○此も喇叭あり○彼等も老人あるや○否彼等も老人にあらば○皆小兒あるや○彼れも小兒にあらば少年あり○彼等常に立ちて坐るることなきや○彼も皆手に筒を持しり

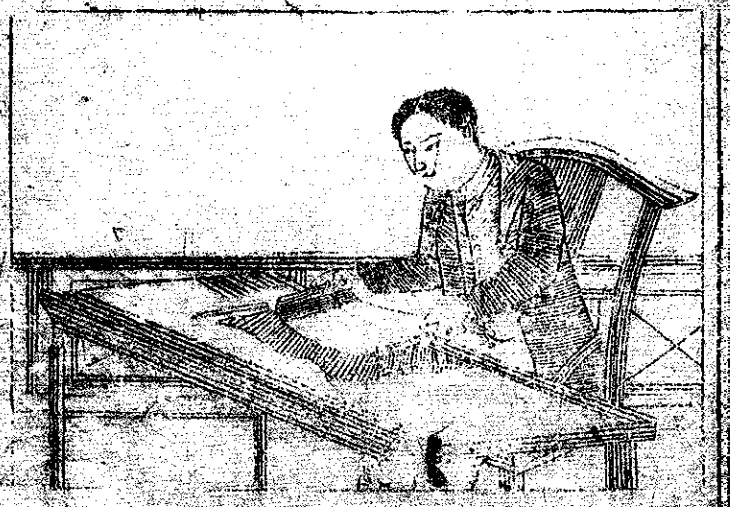
筒紗

巻物

説得

墨壺
筆

汝も此人の筒紗の中に何を持つと思ふや○それ木なりや○否巻物なり○何の巻物なるや○汝も其巻物なることを説き得るや○汝も此人の目を見たりや○彼れ何を見て巻物を見たり○其外汝も何を見たりや○我も墨壺と筆を見たり○此人も筆を操りて巻物に書



巻物を讀むは如く



色々の教へを説き示すことあり

汝て此小女子を見よや○何由去に彼れを其手
を揚げよや○彼女を鳥を入れたる籠を持ちた
り然れども彼女も心をを用ゐること何れから

良き老人も我を好みに従ひ
て我に聽かむるや○彼れ
も小兒を愛するや○然れ
ども善き小兒を愛すされど
も更に慈しき小兒を愛する
ことなり○善き小兒なれば

て鳥を養ふこと能はざる
ゆゑに鳥を彼れが持つや否
や速かに逃げ去りたり○鳥
が逃げ去りたる時森の中
に飛び入りたり○此とき彼
れは手を揚ぐるとも何の用
にも立ちかたし○彼鳥を飛
び去りたり汝再び捕ふこと



能はず○彼れは鳥籠に心を用ゐることなく
又鳥を養ふこと能はざるゆゑに我を鳥の逃げ



第四回

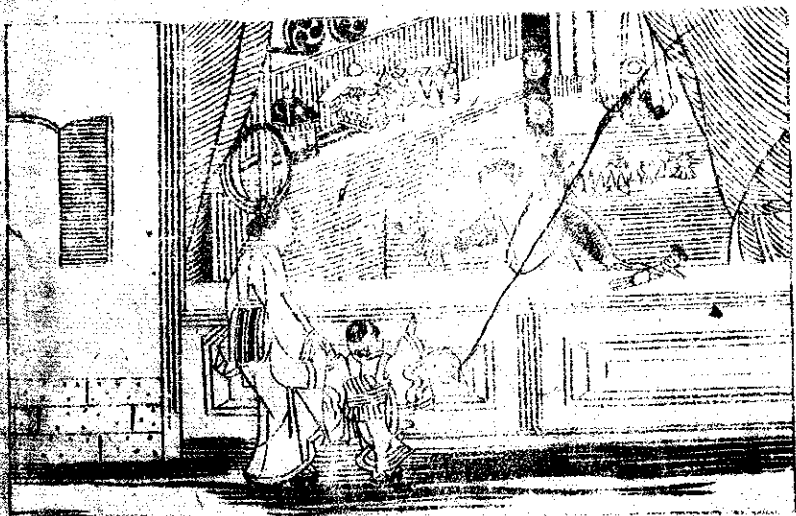
誰も鳥の聲を聴くことを
好まざるや○汝も鳥を
見ること好まざるや○
鳥も水に在ることを好み
て、巢を造り、兒を養育す○
鳥造巢、小鳥なり棘の間に
巢を造り○か鳥も頭
に總あり



此女子を愛らば、人形と輪を持てり○汝も輪
と、人形を好むや○汝も、人形を大切に弄ぶや○
汝も、人形を舞し得るや○此
女子を、輪を廻す為に、棒を
持てり○輪を、速々に廻す
に、速々に、走らざるを得ず

此女を、小兒を愛すとおもふや○又小兒を、此女
を愛するや○汝も、此兒の美しき顔を見たりや
○此女を、甚だ此小兒を愛す○又小兒を、此女を
愛するや○思ふ○我も、此美しき顔をつきて

指 示 飽 環 傷

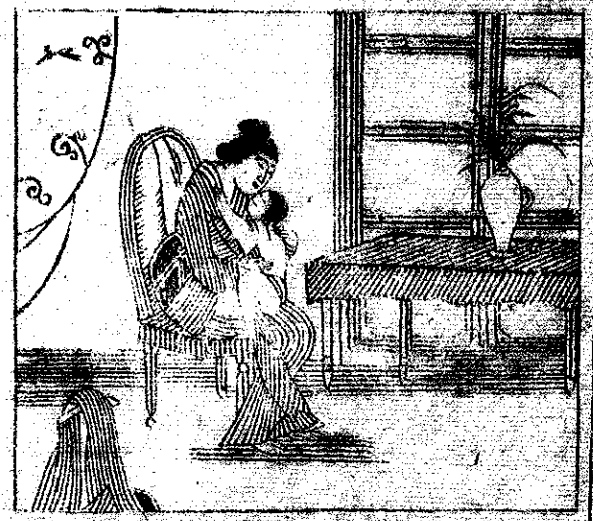


むるやと問ふに小兒と自
ら好む人形を指し示せり
○此小兒と人形をかり弄
ひて飽くときと輪を弄ぶ
ことを好むべし○其外店
に列ねたる品々皆小兒の
好むものなれども此小兒
によき娘なれる只人形の
方を愛し能く心を用ひて
傷むることなき

長 巻 緋 袴 履 合 襪 裸 體 凍 暖 氣

買 小 間 物 屋 此 店

いふ人の彼れも、
り○其巻緋する緋合を履
よ○彼小の足と裸體なれ
ども、此所を暖氣なるゆゑ
に、凍ゆることをなす○汝も、
此兒の名を知るや○否、我
も、其名を知らず



母、小兒を携へて、人形を買ふ爲に、小間物屋に
行きたり、○汝も、此店に多くの小間物のあるを、
見たりや、○母が、小兒に向ふく、何れの人形を、求

終身古木

圓眼

馬早走

静



鳥は終身古木の枝にとりて夜に入ると始て飛び去る。此も大なる鳥にて大なる圓き眼あり。

馬に乗りたる人あり。○如何に彼れも早く走るや。○汝も馬に乘ることを好むや。○私れども彼れのかく早く走ること好まず。馬を静かに歩



鞭 後向 小船

二本橋 大船

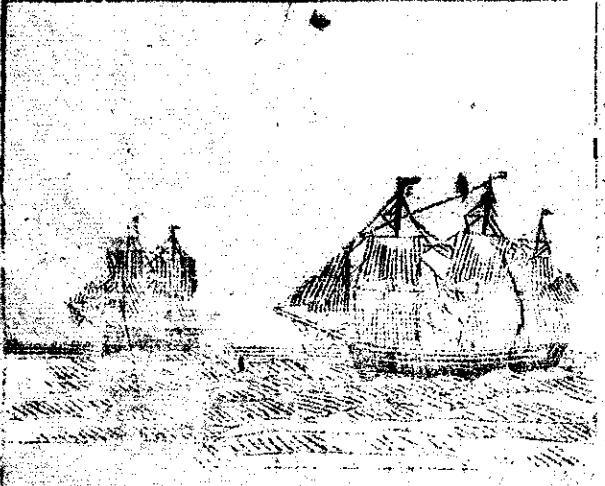
帆

海渡

風吹 浪

よりことを好む。○何故に此馬も早く走るや。○彼人等馬を鞭うつゆゑに早く走れり。○此人の後へ向きたるを見よ。○彼れも水を見るなり。

茲に小船と大船あり。小船に二本橋あり。大船にも三本の橋あり。汝も橋を見よ。○汝も橋の上なる帆を見よ。○汝も小船に乗りて海を渡るを好むや。大船にて渡るを好むや。○風吹きて浪の立つ



渡河 陸 蒸氣船 帆舞船 暴風 海 淨 有様 難儀 軍艦 商船

とき我て船に對りて、渡河するを好ま
 り。風の吹くときにして陸にあるを好む。
 蒸氣船なるや、○否蒸氣船に對りて帆舞船なり。
 見よ、茲に暴風の中に海上に
 浮む船あり。○櫓も折れ、帆も
 破れたり。○恐ろしき有様を
 りや。○此船は帆舞船なり。
 一蒸氣船ならむ、斯く難
 儀するるとあらば、○これを
 軍艦なりや。○否商船なり、



運葉

上臈肥

着



此小兒も幼年より水に
 中に深く入ること船を夫○
 此小兒も何をなさんと欲す
 るや。○これと小き蓮の葉と
 大なる葉を取らんと欲す。
 も一陸より遠く離れて行く
 とき、水も又深くなるべし、

一人の男て、左の手に帽と杖を待てり。○此人と
 圓き顔にして、肥えたる臈なり、又長き髪あり。○
 彼れと、長き上着を着たり。○此上着と、暖なる

運 車 積 草 草 業 現 耐
 草 車 草 屋

一〇 帽を被りたる人、
 上着を着ずして、朋を現せし
 り、これと業をなすゆゑなり。
 ○ 彼れも、我部屋へ、人の来る
 を喜び又人の語りを聞くこ
 とを好み、一人の少年を、
 以彼等の、語りを聞き居たり、



人々、草を積み舉げたり、此草の、枯れたるとき、こ
 れを、枯草と云ふ。○ 枯草を、車に載せ、これを馬に
 引かせて、小屋へ運び入り、○ 草の、枯れたるとき

牛、馬 再、満

耳、目、鼻、舌、口、味、聞、見



く急ぎて、小屋へ、運び入り、
 へ、然らざるとき、肉に遇
 へ、を、再び、満つ、ものなり
 ○ 此、枯草を、牛馬の、食とな
 すたり、○ 馬を、枯草と、麥を
 食すれども、又、甚だ、麥を、好
 みて、食す、

人に、耳目、口、鼻あり、○ 鼻を、香を、嗅ぎ、耳を、聲を、聞
 き、口を、食を、味ひ、又、物を、言ひ、目を、物を見、もの
 を、見、○ 人、を、一、つの、鼻あり、一、つの、口あり、され

尾多語
分

業多語
少

大鶴
茶



とも二つの目と二つの
耳あり。○お一つの口に
して二つの耳、二つの目
ありゆゑに、見聞く如く、
多分に語るべからず。○
又人にも、二つの手と、二
つの口ありゆゑに、業を
多くなして、語りを少く
なすべし。

第五回

大なる鳥にて、雛のとき茶色なれども、生

生雪白長頸長腰
長色



長一なるときも雪の如く
白き色となるなり。○この
鳥も、長き頸にて長き脚あ
り。○此鳥の卵を、大にして
白きものなり。○汝常に、雛
を見ることがありや。○吾常
に見ることが少く、○これ

水中に入り、又高く飛ぶことあり、

教師て、學校へ來れり、茲に、數多の小蛇と、小女子
あり。○此書も、皆書物を読み、事を學べり。○學校

高飛
數多書物

倭 雛 雛 雛



此小兒も卵の傍へ手を遣れり巢の中に六つ
 の卵あり。これと鶏の卵なり。鶏も巢の傍に
 在りて飛び去らず。これと卵を取らるゝことを

めり。此遊び甚た危
 きものゆゑ能く心を用
 いるべし。氷より
 落つることあれを身を
 傷ふべし。普き小兒も
 此危き遊びを好むこと
 なり

日 地 樹 池 氷 滑

書 讀

物あり。汝も學校へ行
 くことを好むや。汝も
 書物を読み又語を綴る
 ことを能くす。や。私
 も書物を読むことを好
 めども、未だ能く讀むこ
 とを得ず



今日も寒き日なり。雪の地上にも樹にも池
 に氷積り。小兒も氷の上を滑ること好

憂

薄黒
模黒

菊
拈梗

憂入るゆゑなり。雛を部屋の中
に巢を造れども、又樹の枝に巢を
造る鳥と、草の中に、巢を造る鳥あ
り。○卵にも、白きものと、青きもの
と、薄黒き模様のものあり。



菊と拈梗の花あり。○
汝も菊を愛するや。○
小兒も、拈梗の花を折
りて、手に持ち、娘も、大
なる菊の花を手に持

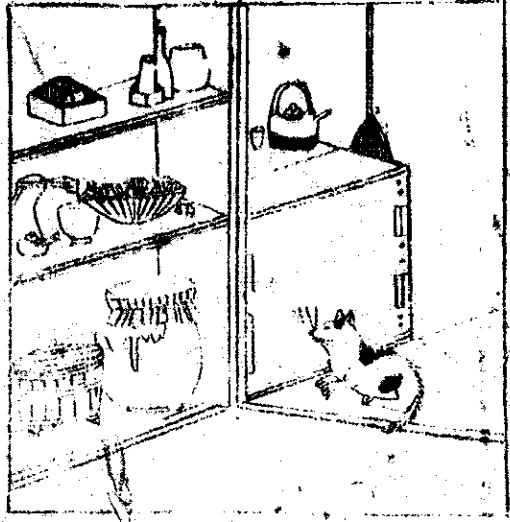
黄色
紺色

數多

鶯
類
登棚

てりの菊の拈梗多し、黄色なり。○拈梗の拈梗多
く紺色なり

數多の鼠あり、これ目
に出づるとどなり。○日の
暮る、とき直に山で、夜
中に至りて、各と遊び出づ
。○此等の遊び出づるとき
は、諸所を歩き、又棚に登り
、又穀類を食す。○然れども、猫の聲を聞くと、
一時に静まりて、巣ぐことなく、驚きて、忽ち穴



馬車

皆我學校

の中へ逃げ入る。鼠の猫の居るとき鼠も遊び
出つることなす

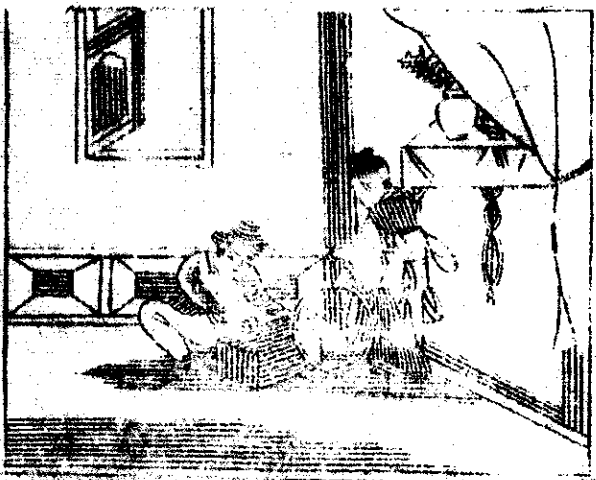


故に馬車ありて數多
の小兒と女子を載せ
たり。○汝も此小兒と
女子を知れりや。○然
り、私も是等を知れり
○これも皆我學校の
人なり。○彼れの犬も
馬と一同に走れり。○

箱響

彼等く汝を見たりや。○彼れも私を見るときに
其帽を脱げり。我も彼れを見るときに必ず帽を
脱がさることなり。

此箱のうちらに響きあり。○汝
くこれ何の響きと思ふや
○此箱の中にあるも鼠又も
猫なるべし。汝も何と思ふや
○此響き甚だ小なるゆゑに
私も小き鼠なりと思ふ。猫に
もあらず大なる鼠にもあらず



神明

我身敬

幸願

善道
時假



茲に四人の小鬼あり其中二人を坐し他の二人を立てり
○一人の老人ありて此小鬼等に神明の語を聞きせり
○又老人の云ふに總て小兒を神明を畏敬して我身の幸を願てむとならざる善き心を持ち善き道を行ふべし○
小鬼のときく春の時候の如

智恵

種時

生長

壯年

時假

遊戯

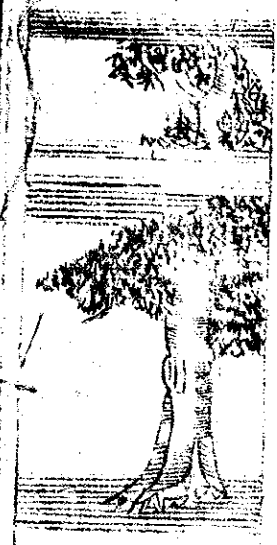
此に我心に智恵の種を時くときなり智恵の種を時くとも學文することなり○生長して壯年に至れも人間の働くべき時と思ふべし○老年に至れを冬の時候の如し
茲に予に杖を擧へたる老人あり是も不自由に目も暗くなれりされども此老人も一時も小鬼にて其時を今の遊戯の如く早く走り又遊び戯れたり



足
脊
倚

大
概
年
大
概
木
離
本
輪

の今を足も愛へるゆゑに、小兒の肩に倚りて、此
 れが爲に導うれたり。○見よ此老人も冬の時
 の、濡れるなり。○汝等も長く春の時候にあり
 べからず、夫必も此老人の如くなるべし。
 茲に概の大木あり。○汝も此木の年を経たる、數
 を知るべし。○今此木を横に以り離して、木目の輪
 を數へ見るべし。○木目の輪も、一年に一つを增
 すものなれど、輪の數に
 して此木の年を経たる數
 を知るべし。○此木も今



其
備
種
初

天津神
 再
昨
無
大
今
夜
光
父
息
多
運
天
道
給
免
謝
災
母
明
朝
幸
難
夜
神



力に有りて枝を空に至るといへども其初め
 僅う一つの種より生じたるなり。其種を至て小
 きものにて汝の手に持ち得べきものなり。

天津神、再昨、昨夜も、無難に過ぎて大幸なり。今朝
 夜明け、光りを下し給ふに上
 り、父母の息災なる顔を見るこ
 とを得たり。多謝。○私を導き給
 へ、幸を興へ給へ。○私を導き給
 へ、免し給へ。○私の死するとき
 へ、天道へ導き給へ。○天津神と

天津神と
 天津神と

主神高皇產靈神御祖
靈神天照大神神皇
靈神天照大神神皇

第六回

濱邊 網引 良 惡 皆 一 同 捕

此人等も、小舟に乗りて濱邊に、網を
を捕りたり。○濱邊に、網を
引くときもこれに懼りた
る魚も大なるも、小なるも、
又良きも悪きも、皆一同
に捕ふることを得るなり。
○汝も茲に三人の男ある
を見しや、○又彼等も、數多



海水

二 投 大 瓶 入 魚

此處 花 國 所 處 美 花 國 所 處

の魚を捕りたるを見しや、○海水の中にも多分
の魚あれども中に良きものと悪きものとあ
り。○一人の男も悪き魚を二匹海中へ投げ入
れたり。○又一人も屈みて、大なる魚を瓶に入
る所なり。○汝も二つの瓶あるを見たりや。此
瓶に魚を入れて、満ちたるときは我が家に持
歸るなり。
此處も如何なる場所と思ふや。○此處も花國を
り。○茲に數多の美しき花あり。○此處も花國を
兒と、娘との遊び場所と思ふや。○汝

鐵 瓜 籠 葉 撰 物 積 棚 葡 萄



此に葡萄の棚あり、○一人の男し葡萄を積み入

る此小児等も喜んで遊ぶと
思ふや○左の手に鐵籠を持し
右の手に杖を持し夫も小児
あり○小児の後に杖を持ち
たる、鐵籠を見しや○一人
の娘も瓜を入れたる籠を持
てり○故に花園に行きて遊
ぶとき、撰りに花を折り、葉物
を取らべうらす

腰 掛 膝 上 房 此 男 花 折



此籠を持ってり○人腰
を掛けたる一人の女あ
り、其膝の上に小児を抱
けり○小児の兄も立ち
く葡萄の房を取れり



此男も花園を作る人なり○傍
らに小児あり○此人も小児等
に向て撰りに葉物を取るべ
からず又花を折るべからずと云
り○又秋も葉物を取らば花を

自取

取りて興ふべし故に小児も自ら取らば
といふのもし此人の教へに従ふて自ら花
を折りたらしむれば花圃に来るを得ざるべし

茲に菓物を積み入れたる籠

あり。此菓物も白瓜と、葡萄

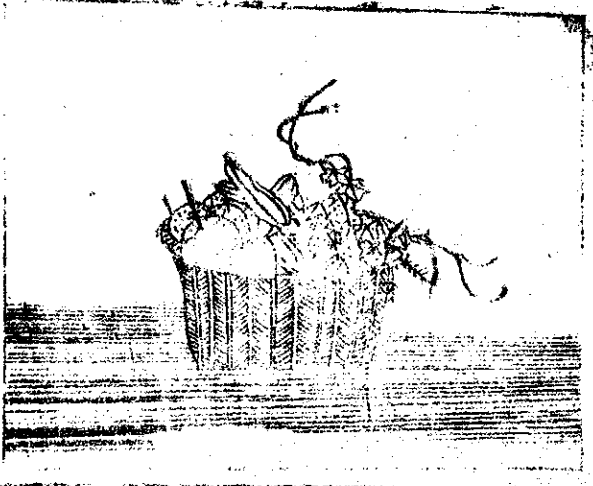
と梨子なり。籠の外に料り

たるも葡萄の蔓なり。籠の

左に其影あり然れど汝も大

陽のある方を知りたるや。

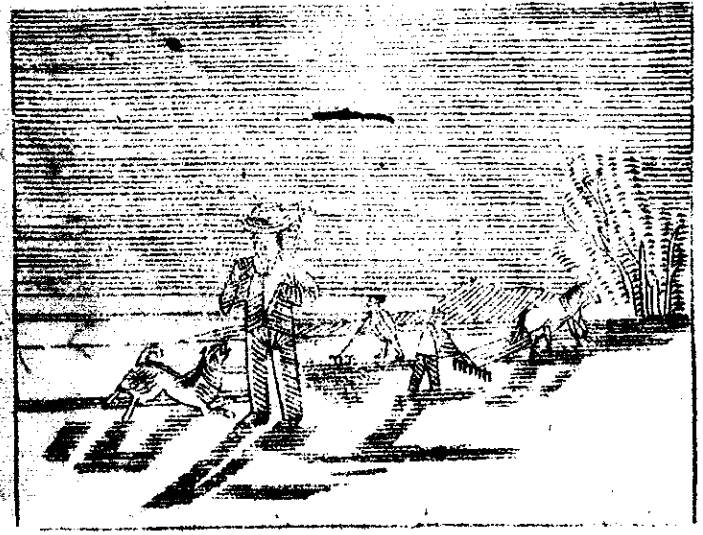
人隄も籠の右にあるべし



大其 陽 籠 梨 白 瓜

今日 晴 天 氣

農 野 畑 草 刈 機



日の出を早よ。今日も晴れたる天氣なり。鳥
が鳴きて水より水に飛び移り。草も青々と

して菓に露を料り。農

多の農夫も野に出で。或

は畑を耕し。或は草を焚れ

り。一々を歌を唄ひて

てり。其傍に犬あり。これ

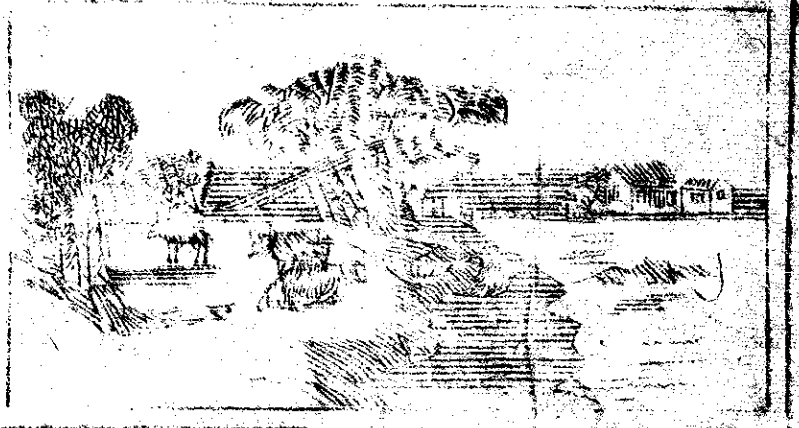
も彼れの畜へ。天なり。

晴れたる天氣にて必ず野

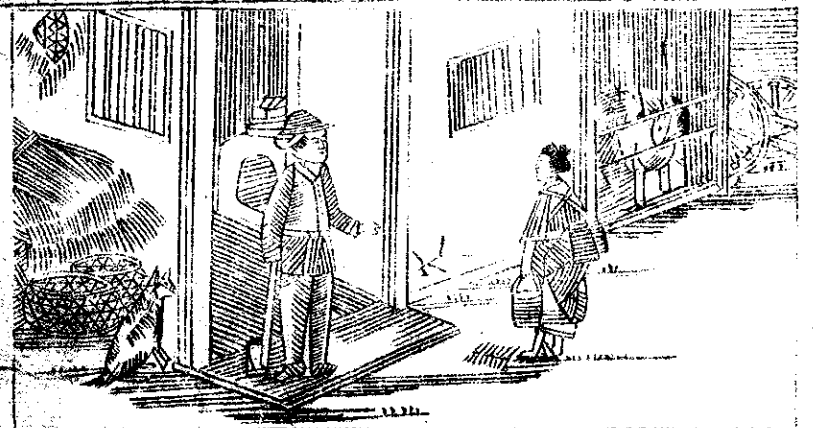
に出で。働くものと知る

日中 燦爛 樹蔭 較涼 母 凌 水 飲 橋 河 書 飲

今も日中になりたり。○大陽の
照らす處、甚だ燦爛なり。然れ
ども、樹の蔭を較涼きゆゑに
卧したる牛と、止ちたる牛あり
○又一匹の牛を、暖かさ、凌ぐ
爲に、河に行きて、水を飲まんと
す。○河の上に橋あり。○人々皆、
日中になりたれども、書飲を食す
る爲に、家に入りたり。



日暮 歸來 牛 糜 乳 絞 手 桶 十 分 乳 汁 甚 忙



日暮になりたり。○人を、啼より、歸り來りし、燦
にあり。○一人の女を、庭に出で
、牛の乳を絞り、手桶に十分乳
汁を得たり。○此女子を、新しき
乳汁を、飲むことを好む。○女
は、戸の傍に、犬のあるを見たり
や。○此人々を、甚だ忙しき人と思
ふや。○日暮になりたれども、今日
変りたる草を、積み入る。爲に
忙しきなり。

鷹

鷹は打つよき鳥にして、他の鳥の恐るゝものな

高山
岩間

り、○鷹を高く空中に飛び
行、○高山の岩の間、又そ
茂りたる、大木の枝に、巢を



平野

作さものなり、○されども、
食物を得る爲に、平野に出
て來ることあり、○今雀を、捕り來りて、雛を養ふ
を見よ

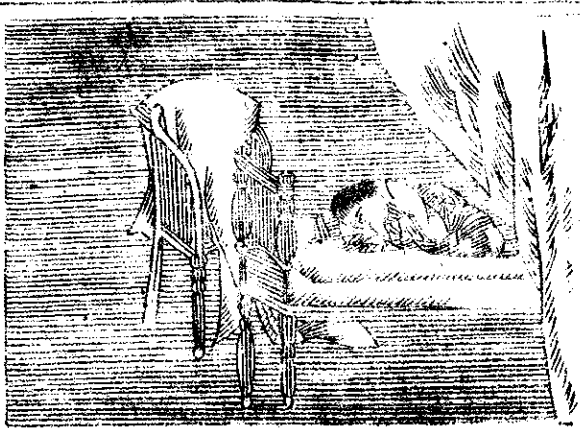
夜中

天津神を常に我を守り給へるゆゑに、私を獨り
に、暗き夜中に、歩行するも、恐るゝことなし、○

獨
暗
眠

見
給

怨
蒙
罰



眠りたるときも神を守り給へ
るを以て、暗き所に、獨り眠るも
恐れ、夫の暗き所にて、神を能
く見給へるを以て、人の知らさ
る所にて、思へることをなせ
を、怨ち、罰を蒙むるものなり、○
人の、知らざることに、神を
能く知り給ふて、善きものに、
ものにて、罰を興へ、思へる

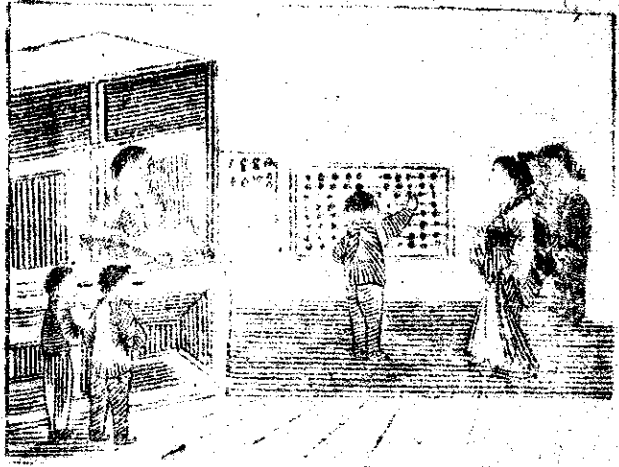
第七回

數得 汝を、物を數へ得るや、○も一父が汝に、林檎を十
 林檎 一與へ、母が汝に、林檎を五つ、
 與ふるときは、汝を幾つ、の林
 檎を得るや、○十六の林檎あ
 り、○汝等を、物を數ふること

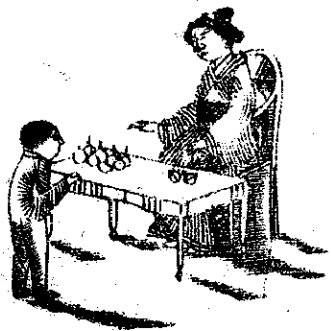
石盤 を學ぶべし、○大なる數と、小

數宗 き數を知らべし、○汝を、石盤、

又を紙に、數字を書き得るや、
 ○一數字を、書き得ぬを、知らざること、思なる
 ことを、學ぶべし、○物の數を知らざること、思なる



机上



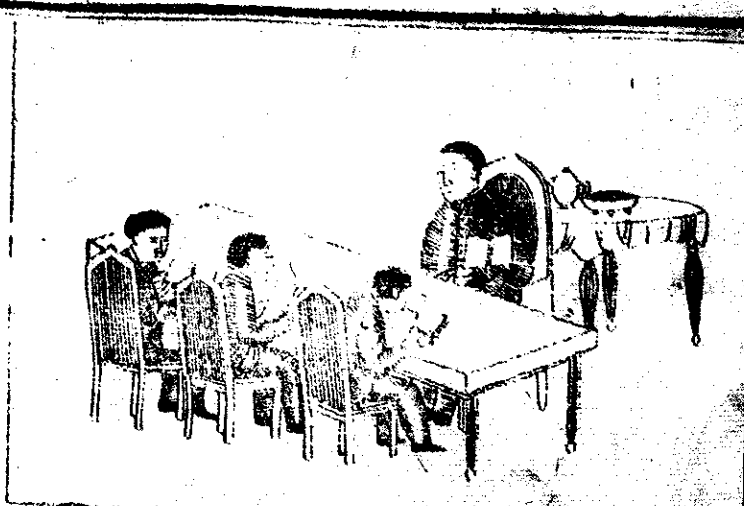
人なり

机上に、十一の梨あり、この中
 三つを、母が持ち去りたり、然る
 と、幾つと、残りたる梨十
 子も、八つなり、

文字 汝等を、文字を書き得るや、○
 書得 文字を書き得ざるよきは、人
 贈書状 に書状を贈ること能はず、○
 このゆゑに、汝等を、文字を書



智慧



汝等も、文字を讀み得るや、
文字を讀むことを知らざれば、
人より賤りたる書状を、讀
むこと能はず。○書物を讀む
こと能わざれば、事を知ること
となり。○見よ、事を知らざらば、
人々、縁慮ありとも、物の用、
立し難し。○ゆゑに、文字を讀
むことを、知らざれば、愚なり。

馬入陸荷毎

誠用類地物日

人となるなり。○汝等も、文字を讀むことを
學ぶべし。

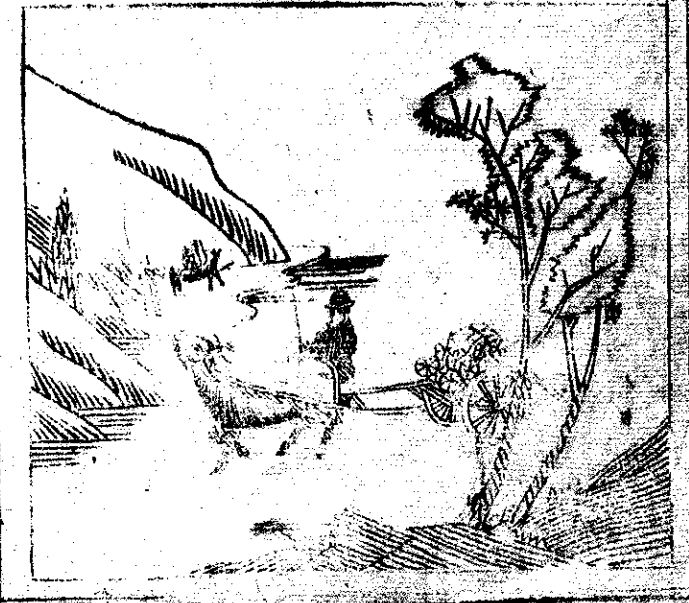
馬と誠に入用なる獸類にて
陸地にて、荷物を運ぶに、毎
日入用なり。○馬は、大なる獸
類にて、長き顔あり。○立髪あ
り。○背の上に、荷を負ひて、遠
方に送るものと、人を載せて
走るものと、車を引くものあり。



牛も馬と同く、入用なる獸類にして、能く車を

牛、肉
 牝牛
 衣織物
 黒羅紗
 羽織物

列き又も荷を負ひて、遠
 方に、送るものなり。○さ
 れども牛を人を乗せて
 走ること能えぬ。○牛の
 肉も食物となりて能く
 養ひをなす。又牝牛より
 乳汁を取ることを得る
 なり。



汝の着たる衣裳も何と云ふ織物なるや。○黒き
 綿の衣裳なり。○此の羽織も黒羅紗なり。○汝も

木綿

毛織物

紺色
 紺色



紺と木綿と羅紗の巾着
 此が第一に暖なりと
 思ふや。○羅紗も毛織物
 なれど第一に暖なり
 其次に暖なり。○汝も
 木綿なり。新しき木綿を
 身を暖むること少し

茲に、白き單衣と紺色の單衣あり。○汝も何れを
 第一に暖なりと思ふや。○白き色も太陽の熱

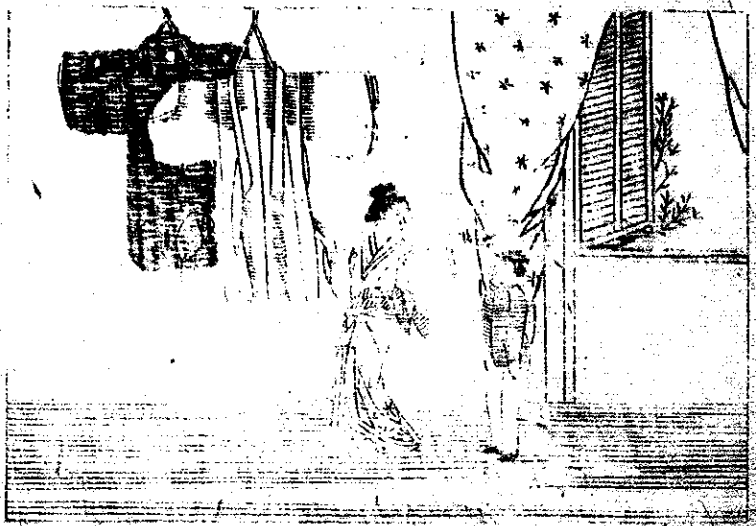
夏
冬

白衣

道理

二
枚

を引くこと少くも夏に、夏
 と涼しければ、冬も寒く、
 紺色も大陽の熱を能く
 遮るすゆゑに、冬も暖か
 ねども、夏も熱く、見よ人
 々、夏も多く白衣を着、冬も
 多く紺色の衣裳を着、こ
 とも、この道理あるゆゑな
 り



茲に二枚の圖あり皆人の働く所を画りけり○

用
現

稻
麦



物の圖え、野に出で、
 種を蒔く所なり○こ
 の人と携へたる籠
 種を入れたり、この人
 の用も、膝も、現れ、
 り、これと熱きとき、
 中に出で、働くゆゑ
 なり

次の圖え、稻を焚りて、我家に持ち歸る種を、
 又、稻を打ちて、種を、
 又、種を、
 又、種を、

汗流

農夫

苦勞

蠶育

糸取

朝早起

の汗を流して地は落つ

るを見よ○農夫は佃様

に働うざれを穀物を得

ることなし○汝等常に

穀物を食するときは農

夫の苦勞を念ふべし

これ蠶を育ふ所なり○茲に三人の女あり蠶

を育ひたる所と糸を取り舉る所あり皆朝早く

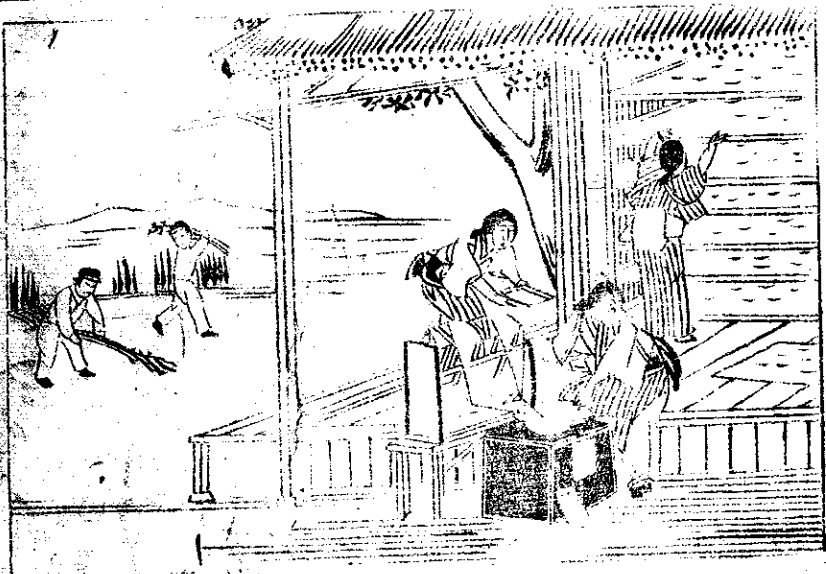
起き夜中までも眠らず髪も美しく揚ぐるごと

能て夫○日々汗になりて働けり○又二人の男



此葉取
男捕

養飼



あり糸を取り葉を摘む

所なり○此男は野に出

で、耕す人と同じく、汗

も脛も現え、汗を流し

て、働けり○佃様の數多

の男女が、苦勞して、指は

ざれど、糸もなしく、絹もな

し○汝等、暖々たる衣裳

を着たるときは、必ず蠶

を飼ふ人々の苦勞を忘

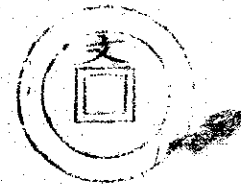
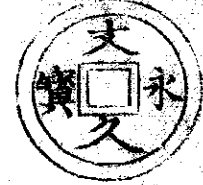
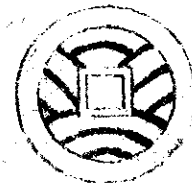
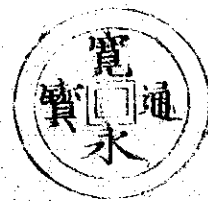
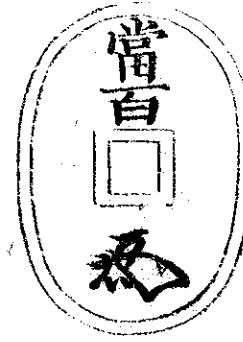
貨幣

茲に種々の貨幣あり

るべからず

四銭幕府

右四品の貨幣を、錢といふ、徳川幕府のときより

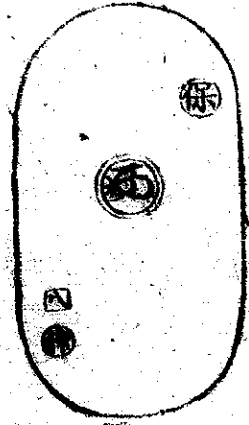


通用

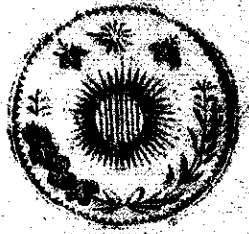
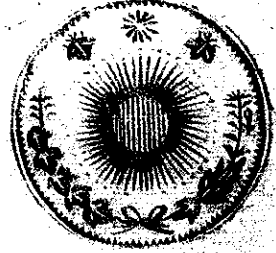
今日までも通用ししものなり

金

此五品の貨幣を金といふ、徳川幕府たりしとき



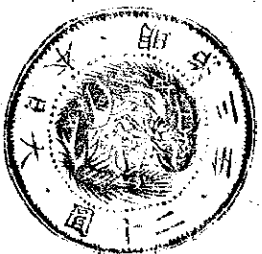
の通用金なり



銀貨

右五品の貨幣を銀貨とす

右五品の貨幣を金貨幣とす



の面あり
一銭といひ白錢を、一圓といふゆゑに十二錢半
と金二朱に當り、二十五錢を、一分に當り、五
と二分に當りなり、

拾念

發行府

右三品を銅貨幣と云ふ
此三種の貨幣を、政府の發行にて當時一般通用

